# 創価大学

[ SOKA UNIVERSITY ]

## 挑戦するマインド、課題解決のための知力・人間力を養う独自の教育プログラム

海外からの留学生と日本人学生の交流会「留トモイベント」の様子

**全学をあげてグローバル化を推進し、文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援事業の中間評価でも最高評価の「S」を獲得している創価大学。国内外で正解のない課題に果敢に取り組む人材を育成するという同大学の教育の根幹にある考え方、具体的なプログラムについて、学長と卒業生に話を聞いた。**

取材・文／伊藤敬太郎　撮影／丸山 光

### 「創造的世界市民」として世界に貢献する人材を育成

2021年に創立50周年を迎える創価大学。文理にまたがる8学部10学科を擁し（**図1**）、幅広い領域に人材を送り出し続けている。

全学的にグローバル化推進にも力を入れており、2014年にはスーパーグローバル大学創成支援（タイプB）に採択。その取組は2018年2月の中間評価で最高評価「S」を受けた。

**図1　創価大学の学部・学科構成**

| | |
|---|---|
| 経済学部 | 経済学科 |
| 経営学部 | 経営学科 |
| 法学部 | 法律学科 |
| 文学部 | 人間学科 |
| 教育学部 | 教育学科 |
| | 児童教育学科 |
| 国際教養学部 | 国際教養学科 |
| 理工学部 | 情報システム工学科 |
| | 共生創造理工学科 |
| 看護学部 | 看護学科 |

同大学は、国内外を問わず、世界中のどこでも、多様な考え方の人たちと合意形成して課題解決に取り組むことができる「創造的世界市民」の育成を理念として掲げ、さまざまな教育プログラムを導入してきた。これからの社会で「創造的世界市民」が求められる理由について馬場善久学長は次のように語る。

### 予測のできない時代に求められる人材像とは

「AIをはじめとするテクノロジーの進化、グローバル化の進展に伴う国際情勢の変化、さらには気候変動などの要因が絡み合い、今、世界は予測のできない時代に突入しています。そこで求められるのは正解のない課題に取り組み、新たな答えを導き出し、実行する人材。それこそが私たちが掲げる創造的世界市民なのです」

では、そのような人材を育てるために創価大学はどのような教育に取り組んでいるのだろうか。

**馬場善久**学長

「各学部で学ぶ専門知識やスキル、さらに語学力などは基礎として重要ですからしっかりと身に付けてもらいます。しかし、それだけでは変化し続ける社会で生きていくための力としては十分ではありません。そこで本学が力を入れているのが学外で社会に直接触れて学ぶ機会の提供です。問題発見力、課題探究力、社会に出てからも学び続ける力などはそういった場でこそ養われるものですから」

その機会提供の取組は非常に幅広いが、なかでも柱となるのがGCP（Global Citizenship Program）、

GLC（Global Leader College）、留学・海外インターンシップ、ゼミでの教育・活動の4つだ（図2）。

## 未知なる経験を力に変える マインドを養う

「例えば、2010年からスタートしたグローバル人材育成プログラムであるGCPには、フィリピンでの2週間の研修を組み込んでいます。現地には貧困の問題があり、当然衛生環境も日本とは違いますし、社会基盤も違います。現場に行ってみるとネットなどで学んだ知識とは違うこともたくさんある。そういうなかで、事前学習に臨み、チームで課題発見し、現地の先生や学生の協力も得て、現状より少しでも良くなる解決策を導き出すという経験を通して学生は成長します」

しかし、単に学外に出て未知な世界を体験するというだけでは、経験を力に変えるには十分ではない。GCP、GLCといったプログラムに共通しているのは、基盤となる語学力や知識・スキルの習得と同時に、未知なる課題に立ち向かうためのマインドを養成すること。その方針は各学部のゼミ教育においても同様だ。

「一つには、本学の建学の精神でもある、他者や社会に貢献するマインドを育てること。価値創造はまさにこのようなマインドのもとでこそ実現できるものですから。その意味でSDGsへの貢献は非常に大きなテーマとしてとらえています。もう一つは、わかりやすくいうと、諦めず、粘り強く物事に取り組むマインドの養成です。未知な課題を解決しようというときには当然いくつものハードルがあるし、失敗もある。めげることもあるはずです。しかし、そこでまた立ち上がり、仲間と共に前に進む力をしっかりと養うことを重視しています。GCPなどは要求水準の高いプログラムですが、だからこそ学生は社会や海外でも通用する心の強さを身に付けられるのです」

## 先輩をはじめ、人との出会いが 学生の成長を促す

一連の教育で学生の成長を促すのは、人との出会いだ。留学先や地域社会での多様な人たちとの出会いはもちろん、創価大学では、既に社会に出ている卒業生も含め、先輩たちと交わる機会も豊富にある。

「学生にとっては年齢の近い身近なロールモデルが存在することが非常に大きいですね。今後どのようなキャリアを歩んでいけばいいか、くじけそうになったときにどう乗り越えればいいかといったことを、学生たちは先輩から学んでいくのです」

例えば、GLCは留学経験のある卒業生が講師を務める。相談にも乗って

**図2 創造的世界市民を育てる取組**

### GCP
（Global Citizenship Program）

**仮説と検証を繰り返して考え抜く力を鍛える**

学部横断、少数精鋭で、グローバルに通用する人材を育成するプログラム。世界で通用する英語力、世界の課題の実像を分析するために必要な統計学などの数理能力、未知なる課題に取り組み、仮説と検証を繰り返しながらチームで答えを導き出す力などを、主に最初の2年間で徹底的に養う。入学前に応募し選抜に合格する必要がある。

### GLC
（Global Leader College）

**創価大学卒業生が支援するプログラム**

キャリアセンターが主催するグローバル人材を育成するための学部横断型の課外プログラム。留学経験があり、既に社会で活躍している卒業生が指導にあたり、約1年間をかけて、自分で考える力、物事の本質を見抜く力、協調力、表現力、将来を構想する力、学習力などグローバルリーダーとして活躍するために必要な力を養っていく。

### 留学・海外インターンシップ

**世界61カ国・地域、222大学に広がるネットワーク**

2019年10月現在、アフリカや南米、中東なども含む世界61カ国・地域、222大学と学術交流協定を締結。交換留学制度（3カ月～1年）を活用し、創価大学生は世界中で学んでいる。このほか短期の留学や研修、学部主催の留学なども充実。7～8週間海外に滞在し、現地の企業やNPOで働く海外インターンシップでは就業力も養うことができる。

### ゼミでの教育・活動

**学外のコンテストにもゼミ単位で積極的に参加**

各学部でのゼミでも、チームでさまざまな領域の社会課題に取り組む研究や活動が行われている。学外のビジネスコンテスト、社会人基礎力育成グランプリなどにもゼミ単位で積極的に参加。全国レベルのコンテストで優勝し、世界大会に出場するゼミも生まれており、そこで高い成果をあげることが学生の自信にもつながっている。

くれるし、ときには厳しくも温かく励ましてくれる先輩たちの存在は、学生にとって大きな頼りになる。

創価大学は、イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education」が大学の社会貢献への取組をSDGsの枠組みを使って評価した「THE大学インパクトランキング2019」でも日本の大学で4位相当にランクイン。大学として、JICAとJSTが共同で進める「SATREPS」という途上国での研究開発プロジェクトにも参加。国際的な存在感も高めつつある。今後はこうした大きなプロジェクトへの学部生の参加も検討しているという。ローカルも含むグローバルな舞台で未知なる課題に挑む人材の育成に向けて、創価大学は今なお進化を続けている。

## 卒業生 Interview

### GCP、GLCでの学びを通して チャレンジする精神やめげない強さを 養ったことで、ケニア留学を 実りあるものにできた！

2015年文学部卒業
日本マイクロソフト株式会社
**阿部薫子さん**

入学前からアフリカに行って現地の人たちの役に立ちたいという強い思いをもっていました。ところが、入学早々キャリアカウンセラーとの面談で、「今の阿部さんがアフリカに行って何ができるの？　飛行機代を寄付したほうがより多くの人を救えるよ」と言われたんです。すごくショックでしたが、思いだけではダメなんだとそのとき強く認識しました。

GCPで学んだ2年間は本当にハード。でも、そのおかげで語学力はもちろん、苦手な分野の勉強や膨大な量の課題をやり抜く力、正解がない未知の課題に向かう姿勢が鍛えられました。他学部の学生と共に学ぶことで、いろんな視点から物事を見る力も身に付き、チームの中で自分だからこそ発揮できる強みについても考えるようになりました。

3年夏から約1年間、念願が叶ってケニアのナイロビ大学に交換留学。経済学を専攻し、途上国の経済発展のメカニズムなどを学びました。学外では孤児院でのボランティアやケニアの日本人向け情報サイトでのインターンシップなどに取り組みました。私が翻訳した記事でケニアに関心をもってくれる方もいて、小さいながらも成果を実感できました。

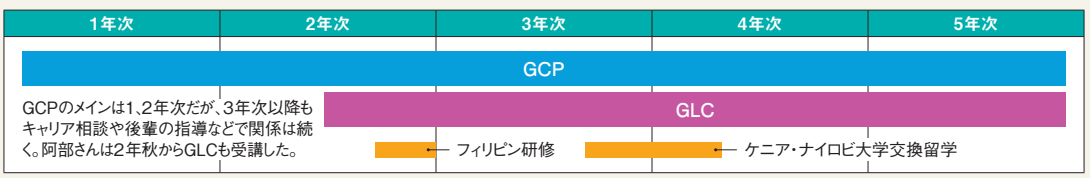
最初、苦労したのは現地の学生との関係構築です。日本人はどうしても“金持ちの国から来た、ものをくれる人”と見られてしまう。でも、そこでめげずに粘り強くアプローチを続けたことで、友達として信頼関係を築ける人も増えていきました。

留学で痛感したのは、開発の主役はあくまで当事者だということ。それをサポートするのが自分の役割。この考え方は社会人になった今も課題解決に取り組む際の基本として抱き続けています。

ナイロビ大学の友人と

ケニアの孤児院にて

### ●阿部さんが受講したプログラム等




### ●勇気を与える、WEBマガジン「リアル ～私の4年間～」

**「中国留学で日中友好に貢献。卒業後は世界の人々の生活基盤を支えたいと大手石油企業へ」**
**「タイ留学で自分が途上国にどう関わっていけるかを模索。卒業後は途上国市場に進出している大手食品メーカーへ」**
など、その他の創価大学生の成長ストーリーがこちらで読めます。